

オックスフォードグループ運動における「心なおし」の実践とその意義

葛西賢太

〈論文要旨〉 オックスフォードグループと呼ばれた道德改革運動の宗教的意義について考察する。この運動は道德再武装と改称し、二〇世紀前半から半ばにかけて、欧米以外の諸国も含めた国際的な交流の機会を提供、諸国の政治・経済・文化に関わる、日本も含むエリートたちに熱心に支持された。支持の背景には宗教運動としての諸側面もあった。この論文では、神にゆだねること (Surrender) と、祈りの中で神からメッセージを受けるお導き (Guidance) という二つの実践について述べる。これら二つの実践は、参加者の自己と宗教・道德伝統との間の不一致を整理し、両者を再接続させるものである。実践によって人生の変革 (Life Change) を体験した人々は、宗教活動にも、またそれを応用した上述の国際交流にも、諸職業活動にも積極的に参与した。

〈キーワード〉 Alcoholics Anonymous、Moral ReArmament、吉本内観、フランク・ブックマン、罪責感、依存

一 はじめに

かつて、オックスフォードグループ運動 (以下、OGMと略記) と呼ばれたプロテスタント系の宗教運動があった。一九世紀の英国国教会内で起こったカトリック的な典礼を重んじた改革運動としてのオックスフォード運動と混同されることもしばしばあるが、OGMはオックスフォード運動とは正反対の福音主義的な志向をもっている。二つの世界大戦の戦間期と戦後の諸国のありかたにOGMは少なからぬ影響を及ぼしている。日本においても多くの要

人を巻き込んで展開した。たとえば、澁澤栄一記念財団理事長の澁澤雅英（一九二五―）や、尾崎行雄の三女である相馬雪香（一九二二―二〇〇八）などが中心になり、新幹線の父と呼ばれる第四代国鉄総裁十河信二（一八八四―一九八一）や、女性運動家であり社会党議員であった加藤シヅエ（一八九七―二〇〇二）、サンフランシスコ講和会議の全権委員として渡米した元衆議院議長・自民党議員星島二郎（一八八七―一九八〇）、初代自民党総裁鳩山一郎（一八八三―一九五九）などが熱心に関わっていた。このように政財界のエリートたちを惹きつけつつ、労働運動側にも接点をもち、両者の共存にも関わっていたのである。⁽¹⁾

OGMにおいて、宗教的な罪は一つの病理として捉えられたのであるが、のちにそれはOGMから独立した集団や同時代の医学者・心理療法家によって、依存 (dependency) あるいは嗜癖 (addiction) 概念へと展開した。依存および嗜癖概念はともに、当事者の性格上の問題点を罪として道徳的な矯正の対象とするだけでなく、生育史上の原因へとさかのぼることによって心理療法的な治療の対象ともする。いずれも、現代人の生のゆくえを語るうえで欠かせない語彙となっている。

運動の指導者が反共産主義的・親ナチ的であったという指摘や批判⁽²⁾、また、参加した人物を中心とした部分的な既述はあるものの、多くの人々をひきつけたその宗教的な実践について、またその罪概念について、我が国で詳細に述べた文献はほとんどない⁽³⁾。したがって以下ではOGMを、へ心なおし⁽³⁾の側面から捉え、現代の諸相互扶助集団に引き継がれた諸実践の意義について考えたい。

以下、第二節では、OGMの運動概要、創始者、実践、日本での展開について簡単に述べる。そして、第三節、第四節では、運動の参加者が自らの罪を神にゆだねて告白する (Surrender) という実践、また導き (Guidance) とよ

オックスフォードグループ運動における〈心なおし〉の実践とその意義

ばれる、神からのメッセージを受け取る独特の祈りの実践について述べる。第五節では、あるアルコール依存症者を例に、OGMの心なおし実践がどのように彼の人生の変革(Life Change)に用いられているかをみる。第六節では、これらの実践がOGM以外のグループに引き継がれる過程で、当事者の責任を問う倫理が希薄化した過程について述べる。第七節では、OGMの実践が、超越的他者とのコミュニケーションを再確保し、道徳的相対主義を乗り越えさせる倫理的共同性を目指していたことを確認し、OGMの流れを汲む現代の諸グループにおいてもこの点が想起されるべきと説く。なお、この論文においては、〈心なおし〉を、島蘭進の考察を踏まえ、⁽⁴⁾「何らかの悩みを抱えた心を、単なる原状復帰や症状の治癒や心の健康ではなく、人間を超越した存在の力を借りて、より高い段階、完成へと向上させると信じられている実践」と定義しておく。

二 OGMとは⁽⁵⁾

ペンシルヴァニア州出身のフランク・ブックマンによって創始されたこの運動は、当初 A First Century Christian Fellowship と自称していたが、運動のアフリカ伝道が現地の新聞に取り上げられた際に英国オックスフォード大学の学生がメンバーに多いと強調されたことから、オックスフォードグループというニックネームがついた。このニックネームについて同大学から変更の依頼があり、道徳再武装(MRA, Moral ReArmament 一九三八―二〇〇一)と改称したのち、Initiatives of Change (二〇〇一―) という名称に改まり、国際交流・倫理団体として活動している。⁽⁶⁾

「道徳的退廃の時代」という認識

OGMはある種の道徳復興運動と見ることができる。禁酒法のみならず普通選挙法や廃娼運動などのさまざまな社会改革を志したキリスト教婦人禁酒同盟(WCTU)やその日本の支部といえる基督教婦人矯風会、また貧困者や大酒飲みや娼婦の生まれ変わりを促すためさまざまな社会事業を行っている救世軍(The Salvation Army)もそれらに含まれるだろう。⁽⁷⁾これらの運動は、近代の道徳的宗教的規範が弛緩していると批判し、再活性化を目した。OGMにおいては、家族における親子間や夫婦間の不和、不義、贈賄や脱税などの不正、暴力、怠惰や自慰などが、改善されるべき道徳的退廃として取り上げられた。自己規律や家族問題の観点から大酒飲みの更正が試みられたし、また世界平和に貢献するような個人を育成することが重視された。共産主義は無神論を説き社会秩序を乱すものとしてOGMにおいては問題視されていたが、一方、労働者の苦況は理解され、相互理解と自助努力による向上を説くことで、経営側と労働者双方の和解を図ろうとした。このため、道徳的宗教的観点から労働者にたいして共感的であったエリート層の支持も得ていた。禁酒運動が国家や企業の生産性の向上と結びつけて支持されたように、OGMも担い手たち(資本家も労働者もともに)の経済的な成長につながるものと受け止められた。ストライキなどの社会秩序を乱す問題は、経営者と労働者双方の相互理解と自助努力が、神を仲介者としてなされることで自然に解決されると考えられていた。

ただし、婦人の参政権獲得など女性の地位向上や禁酒・廃娼運動などの社会規範強化を目指したキリスト教婦人禁酒同盟や、慈善に依存せず経済活動を適切に組み込むことにより社会事業の普及を目指した救世軍などと比較して、OGMの目指すところは明確ではなく、また両者に比すと官僚制的な組織を整えることがほとんどできなかった

た。それは、個人の生の変革 (Life Change) が重視されて自助努力に力点が置かれたこともあるが、同時に創始者ブックマンのインスピレーションによるイベントが活動の中心になり、短期的には盛り上がりながらも長期計画的な観点に立ったものではなかったことによると思われる。

このような制約はあるものの、模範としてキリストを仰ぎ、より彼に近い生き方をしようということが実践の核にあったOGMでは、以下のような「四つの霊的活動」をおこなうよう勧められていた。(一)罪や誘惑について、クリスチャンとして神に人生を捧げたもう一人の人とわかちあい、別の、まだ生まれ変わっていない人が自らの罪を知って認めうるのをたすけるために、わかちあいの場をもつ (Sharing)。(二)私たちの人生、過去、現在、未来を、神の庇護と導きへと委ねる (Surrender)。(三)私たちが不当なことをしたすべての相手に、直接にあるいは間接に償いをする (Restitution)。(四)神の導き (Guidance) を聞き、受け入れ、信頼し、私たちの言行すべてにおいて、大小を問わず、実践し続ける。以上の四つである。⁽⁸⁾

ブックマンの著書は、彼の講演録『世界を再造する *Remaking the World*』のみである。彼についての伝記や、OGMの重要なメンバーの著書や伝記から、そして諸分野で活躍したメンバーの言葉から、行われていた実践の内容を推測することができる。OGMの思想は、中国、日本、アフリカ等々への伝道活動の現場の経験が結晶化されたものである。体系的な神学よりは、覚えやすく、また語りやすく整理された、四つの絶対 (正直 honesty, 純潔 purity, 無私 unselfishness, 愛 love) / 五つのC (覚悟 Confidence, 告白 Confession, 確信 Conviction, 回心 Conversion, 継続 Conservancy あるいは Continuance) という形式で語られた。たとえば『魂の手術 *Soul Surgery*』では、医師が手術に臨むように躊躇なく個人の罪という患部に立ち向かう姿勢が説かれ、また、集団ではなく個人に信仰を伝え

る」と (personal evangelism) の大切さが強調されている。⁽⁹⁾ また『オックスフォードグループとはなにか *What is the Oxford Group?*』では、万人が何らかの意味で罪人であり、人に言えないような罪をきちんと神の前で、そして神を信じる人々のいる集会で告白することが大切であると述べられている。⁽¹⁰⁾

集会などの場で、嫉妬や恨みなどの対人関係問題、試験などでの不正、性をめぐる問題や飲酒問題など、ふだんは他人に語らないようなことが告白された。神の前でみずからの身をゆだねるこの告白は、それゆえに降伏 (Surrender) とも呼ばれた。朝の内省 (Morning Watch) あるいは静謐な時間 (Quiet Time) などと呼ばれる、定期的な内省の時間を取ることが勧められた。このときは、聖書の章句の学習に続いて祈って、インスピレーションをノートにひたすら記す。また皆で特定の問題について神の導きを求めてひざまずいて祈るうちに、導きと呼ばれる神からのメッセージをインスピレーションとして受け取ることができると考えられていた。参加者が増えると集会は大変な規模となり、著名人が実名でスピーチして、OGMの活動によって断酒した体験や、自分の罪を懺悔することもあった。

OGMが内部にヒエラルキーをもたず官僚制的な組織を整えていないために、運動に関わった人数は不詳だが、数千単位の集会もしばしばおこなわれていたこと、またブックマンを介して世界各地の人々が出会う機会がOGMによって日常的に提供されていたことがわかっている。⁽¹¹⁾ 二〇世紀において各国政財界の多くの重要人物の交流を促したこの運動は、一九六一年のブックマンの死以後、最盛期の勢いを失う。

創始者、フランク・ブックマン

オックスフォードグループの創始者は、米国ペンシルヴァニア州出身のルター派牧師ブックマン (Frank Nathan-

iel Daniel Buchman 一八七八―一九六一)である。彼はキリスト教青年のための寮を創立したのだが、経費削減を試みた他の運営理事と対立して、解任に近いかたちでそれを手放さなければならなくなり、理事たちに対して強い恨みを抱いていた。一連のストレスで体調を崩したブックマンは、一九〇八年、ヨーロッパに療養旅行に出かけた。イギリスで、福音主義キリスト教徒のための「ケズウィック会議」に参加した後、彼は日曜の朝に小さなチャペルに立ち寄った。そこでキリストが十字架にかけられた場面を語る説教を聞く。彼自身が牧師としてたびたび説教しているテーマであったにもかかわらず、普段と違う強烈なリアリティが感じられた。感動したブックマンは自分のこれまでの行動を深く反省する。彼はその体験を以下のように表現している。

私にはあの方〔キリスト〕の手のひらに刺された釘が見えましたし、あの方の足にあるもっと大きな釘も見えました。脇に槍が突き刺さるのも見えました。あの方の顔に悲しみと無限の苦しみが浮かぶのが見えました。

私があの方を傷つけているのだと分かっていました。私とあの方とはかけ離れていましたから：私の罪、私のプライド、私の自己中心、私の病んだ意志は、私から神とキリストを隠してしまいました：私は神に、私を変えてくださいと祈り、神は〔運営理事会の〕ことを改めるのだ、と言われました。

福音書の磔刑の記述と通じる前半に続いて、後半部分が、この体験で彼が感じ取ったことを語っている。キリストを苦しめているのは自分の罪やプライドや自己中心であったのだと感じたブックマンは、自分を変えてくださいと祈り、それに対して神から「運営理事会の問題を改めるべし」との返答があったと受け止める。彼は、問題にゆだねて自分の側が謝罪すべきだと感じ、運営委員会のメンバー六人全員に、自分の罪の許しを請う手紙を書いた。これによってブックマンの不調は消え、強い解放感を得た。その日の午後、紅茶の時間に同席した人々にこの

体験を語ると、その中のある大学生が彼に相談を持ちかけた。ブックマンと彼は、湖の周りを歩きながら、一対一でその問題を分かち合った。⁽¹²⁾

磔刑を受けるキリストを思い浮かべながら彼が自らを罪深い者と認識し、それを変えてほしいと直截に神に求めて、謝罪状を書くことによつて得られたこの回心体験と、悩み事を一対一で分かち合った出来事、そして直截的な神への彼の求めに返事が返ってきたと彼が感じたことが、いずれも重要だ。自分の「罪深さ」を告白することは、のちにOGMの仲間を相手に行われるようになり、神に身をゆだねることと呼ばれるようになる。罪深い自分を変えてくださいという率直な祈りは、それに対する神からの「返答」とセットになり、導きとして、方法が整理されていく。

ブックマンは行動力豊かで、初対面の人の心をつかむのにきわめて長けていたらしい。YMCAの一員としてインドや中国などへの国際的な伝道に取り組んできた彼は、人間を知ることへの強い実際的な関心を持っていた。彼がおこなった、神に身をゆだねることと、導きの実際については、次節以降で述べるが、当然のことながら彼の関心はこの二つの実践に生かされている。

〔しゃべりすぎては〕人の心を勝ちとることはできない。何も言わないでいることが最上の場合が多い。百も知っていることでも、相手が話すまでは黙っていた方がよい。人を変える秘訣のいろはは相手が誰にも話したことのないことを話し出すときにはじまる。⁽¹³⁾

「相手が誰にも話したことはないこと」を話させて、相手の人生を変革させるのが、ブックマンの方法という。ブックマンは世界中を飛び回って講演し、また人に会い、マハトマ・ガンディーや詩人タゴールなどと親交した

オックスフォードグループ運動における〈心なおし〉の実践とその意義

り、海外伝道で出会った米国人の「人生を変革」させたりもした。また第二次世界大戦後のアジア諸国で敵意をもつてみられていた日本のため、OGMメンバーの議員がそれらの国で国際的な行事を介して謝罪したり、当時の総理大臣からの謝罪を伝えたりして、その後の関係改善の糸口をつけもした。⁽¹⁴⁾ ナチスの重要人物が、ブックマンを反共産主義の鍵になる人物とみて面会を求めてきたり、またOGMメンバーが筋金入りの共産主義者を回心させ、中国や旧ソ連の共産党から要注意人物と見なされたりしたこともあったという。⁽¹⁵⁾ 出会った人々はOGMのなかで、あるいはOGMと協力して、劇や映画や国際会議などのイベントを行い、大小の集会を開き、参加者にも影響を及ぼしていく。結果としてOGMは世界各地に支持者を得、またイベントには多くの人が資金を献じて、その資金が国際的なイベントへと投じられていく。

彼自身あるいはOGMメンバーが「導き」の中で得られたさまざまなアイデアは、迅速かつ精力的に実現された。OGMは大変な行動力を誇るようになったが、活動が恣意的になる危険もあった。ブックマンが特定の弟子に厳しい態度を取りつづけたことや、⁽¹⁶⁾ 愛を求めて苦しんでいた人物の部屋に大きな花束を届けさせたなどのエピソードは、既述の親ナチ的に取られた発言などと同様に、ブックマンの活動が誤解されかねない性格をはらんでいたことを示している。

日本での展開

OGMの日本での展開について簡単に触れておこう。日本では、OGM（日本に入った時点ではMRA）は、青年の国際交流運動という側面が目につく。ブックマンは来日時に岸信介と二度会い、またロンドン滞在中の澁澤英を私邸に招いて世界中からの来客と引き合わせるなどしている。そうしたエピソードや登場する人物をみると、

青年の国際交流のサロンを展開しながら、積極的に各国の政財界人・文化人同士のネットワークを作ってきたことがわかる。ブックマンはアジア改革の基地として日本に期待し、小田原に拠点を作らせ、澁澤雅英は欧米以外にも、フィリピンやインドネシアなど東南アジア諸国との人の交流を図った。そのため、OGMは、戦後の日本において、海外渡航手段の一つとして、すなわち「外国への窓」としての意義が高かったという。積極的に行き来させた人々には国際会議や対話集会を担えるエリートもいたが、手作りの演劇上演・映画上映などをおこなうことでエリート以外の人々をも巻き込み、労働争議解決やアジア諸国との和解にも活躍した。たとえば、一九五九年夏に福岡の三井三池炭田で起こった労使対決に対して、ドイツの炭鉱夫たちを大量に現地に送り込んで労働と和解をテーマにした劇を演じさせ、また炭鉱夫どうしの国際的な対話を設定することで、紛糾していた労使対決を終息させるという離れ業がおこなわれた。

ブックマンの死後、運動は分裂して勢いを失い、また高度経済成長に伴って海外渡航が容易になったため、小田原の拠点は役割を終え、二〇〇七年に閉所した⁽¹⁸⁾。しかし、盛時には、多くの国会議員や財界人が訪れ、また企業から語学等の研修生を受け入れていた。青年の国際交流運動という側面が目立ち、参加者の心なおしの面は控えめに語られているが、後者によってOGMが支えられていたことを見落としてはならない⁽¹⁹⁾。以下では、ゆだね、神からの導きを得、生まれ変わる、というOGMの宗教儀礼について述べよう。

三 ゆだねて生まれ変わる

道徳的宗教的規範の適用にあたって、多くのクリスチャンが妥協しているがゆえに、近代文明は崩壊の危機に瀕

しているとブックマンらは考えていた。第一次世界大戦はそのような「反キリスト的な」力の現れにほかならず、にもかかわらずキリスト教に対して懐疑的である人々が「神の咎を主張して非難しようとする考え方に飛びついて」道徳的宗教的規範を軽んじる状況が広がっていると見る。それを浄化する掃除は、「帚ではなく掃除機と殺菌剤」を使う荒療治でなければいけないと彼は述べる。⁽²⁰⁾ 妥協を重ねてきたクリスチャンの魂は、彼や彼女が犯してきたさまざまな罪が神と彼らとの間に立ちはだかつて、神と直接につながることはできないと考えられた。そのため彼が用意したのは、自分の身を神にゆだねて罪を告白することであり、また神に直接（直截）また具体的に問題を訴えることにより直接の応答（導き）を得ようとする方法であった。

身を神にゆだねて罪を告白するということは、具体的にはどのようなようになされたのか。原型となったのは、ブックマン自身が寄宿舎の運営理事たちに謝罪するきっかけとなった宗教体験だが、ブックマンからOGMの人々に対しては、たとえば、以下のようになされた。

昨年冬、ニューヨーク市で、ある大学生のリーダーが、キリスト教伝道団に入るかどうかについて、ブックマン博士に相談にきていた。：「気持ちが決まらない彼に」：夕食後、ブックマン博士は学生を自室に招いてさらに話をした。もう少し学生は心を開いて「私がなぜ伝道団に入れないかを申し上げましょう。わがまますぎるのがどうも欠点でしてね」「ほかには何かありますか」とブックマン博士はたずね、学生は「ありません」と答えた。そのときブックマン博士には「彼が本来話すべきこと」が確信できたので、身を乗り出してごく自然に「あなたが悩んでいるのは〇〇のことではないですか？」と尋ねた。その途端、プライドの壁は崩れ、彼は突然泣き出した。：「別れ際に学生は」「ブックマンさん、私に欠けていたものを今夜あなたが見つけてい

なかつたら、私はあなたを恨んでいたでしょう」と語った。⁽²¹⁾

学生の気持ちを変えさせたのは、ブックマンの「あなたが悩んでいるのは〇〇のことではないですか？」という問いかけだった。この「〇〇」には、不義か不正か、不信仰か、あるいは対人関係の悩みか、いろいろなものが入りそうだが、いずれにせよ彼にとってはとても切実なことだったのだろう。ブックマンは重々しい仕方ではなく自然な問いかけとして、しかし、彼の心中にあるものを指摘してみせる。彼は驚き、感極まつて泣き出す。

ブックマンはどのようにして彼の悩みを知ったのだろうか。特殊な直観能力だろうか。この点は次節で述べる導きに関係する。ブックマンは新約聖書の「山上の説教」などを参照しながら「四つの絶対」やさまざまな罪を定義している。⁽²²⁾ また上述の学生のような人の場合は近い世界観を共有しているだろう。穿った見方なら、一通りの罪のリストの中から選び出して投げかけてみただけとなるかもしれない。すでに述べたようにブックマンは人間を観察することにとっても力を入れており、⁽²³⁾ “活字を読むように人を研究する”ことが重要だと人にも勧めているが、それは、「人を変える秘訣のいろはは相手が誰にも話したことのないことを話し出すときにはじまる」ためであった。

ブックマンは考える、神の前で問題だと思ふことを包み隠さず告白し、その問題を解決してもらいたいと正直に願ひ、そのように神に直截的に祈ることにより、人間は変わることができると。そのために、神に自らをゆだねようとする相手とともにひざまずいて祈るとき、ブックマンは口に出して、その願ひを直截に述べさせ、また彼自身もそのようにする。すねた人生を送ってきた少年が「ぼくには自分がどうにもならない、なんとかしてください」とひざまずいて祈るように導き、また、ある青年のために「神さま、どうかこの青年が、きたない習慣をやめられますように」⁽²⁴⁾と声に出して、ひざまずいて一緒に祈る。OGMでは、個人の特徴をつかんで伝道する (personal

オックスフォードグループ運動における〈心なおし〉の実践とその意義

evangelism) ことが、繰り返し、強調されていたことも、再度確認しておきたい。そのために「ゆだねる」ことは役に立つのだが、語られた内容をもとに個人のための伝道を仕組むのではない。告白以前の段階でその悩み・罪をつかむ、祈りと導きの離れ業を行使することに、ブックマンが力をいれていたことを確認しておきたい。道徳的人格だけでなく、これがブックマンの魅力、カリスマであった。また、語らせる側にも自分に正直であることを OGM は求めていた。「私たちが自分たちの真実を語るとわかつていけば、窮している人も、自分自身の真実をより語る気持ちになるといってよい。他の人を生まれ変わり (Life Change) に導こうという気持ちでそばにいる (witness) ことが、相互に信頼しあうための基盤である」と、OGM のある著者は語っている。⁽²⁵⁾ 語らせる側が正直であれば、そこに不思議な力が働いて、問題への回答を得ることができると考える。これが導きと呼ばれるものである。

四 導きという祈りの実践

導きについて、ブックマン自身は、以下のように語っている。

人があまりに電話をかけてくるので私は電話を二つ必要としていました。ところが、私はもう一つ電話をもっていたのです。それは生ける神からのメッセージを伝えてくる電話です。神は私になすべきことを命じ、私はそれらを紙に書きつけました。⁽²⁶⁾

もう一つの電話とは導きのことである。導きを受けるうえでの留意点は、必ずしもまとまって書かれているわけではないが、それらを整理すると、ほぼ以下の通りと考えられる。(一) 具体的に、正直に問題や願いを抱く。(二) それを声に出す。(三) ひざまずいて祈る。(四) できれば一人ではなく、神にゆだねる告白の場に立ち会った仲間と一緒に

に祈ってもらおう。(五)祈る時間を定期的に(できれば毎日定時に)もつ。信仰を保つため、また、導きの真正性を判断できるようにするためである。(六)それらを書き留める、などである。たとえば、毎朝、この世界の「日常の労苦と平凡」が始まる前に、聖霊とともにある静謐な時間をもつことは、一日をよりよく過ごすための鍵になる。その時間に、神が私たちの精神に助言を焼き付けてくださるからだという。導きというインスピレーションを紙に書くように勧めていることも興味深い。「オックスフォードグループでは、神と自分だけで過ごした時間にわいてきた、神がくださった考えやアイディアを記録するために、鉛筆とノートを用いることを強く勧めている。どんなに小さなことであっても、私たち自身や何らかの問題についての真理が、私たちのところにきた際に、失われてしまつてはならないと思うからだ」⁽²⁷⁾。

五 ゆだね、導きを得て、人生を変革する

神に身をゆだねて告白し、導きを得て、人生を変革することが、実際にはどのようなことにおこなわれたのか、以下に見よう。取り上げるのは、オハイオ州アクロンという町に住んでいた、ロバート・H・スミスというOGMメンバーで、外科医である。彼はアルコールへの依存で長年苦しんでおり、断酒を繰り返し試みたがうまくいかなかった。一九三三年に、ブックマン一行がアクロンを訪れる。彼らが訪問する都市としてはアクロンはやや小さかったが、タイヤ製造大手のファイアストーン社があった。同社社長子息はアルコール依存で苦しんでいたが、OGMで断酒できた返礼に、社長夫妻がブックマン一行を招いたのだった(彼はのちに再飲酒してしまう)。ブックマンを囲んで開かれたOGMの大きな集会上、スミスも妻と参加し、感銘を受ける。そして家庭集会上に参加し始めるが、彼

は断酒できない。当時のことを、スミスは以下のように語る。

彼らからは、ミーティングに欠かさず来るように言われていたので、私は毎週、休むことなく通った。どこかの教会に所属するべきだとも言われたので、私はそうした。また、祈りの習慣を身につけるべきだとも言われ、少なくとも私なりにかなりの程度までは従った。それでも連日、夜になれば、すっかり酔っぱらっていたのだ……。何が悪いのか、私には、さっぱりわからなかった。⁽²⁸⁾

集会の主催者であるヘンリエッタ・サイバーリンクは、スミス夫妻がアルコールの問題を隠そうとしていることに気づき、彼自身が本気で神に身をゆだねて告白できるような場を整えるしかないと考える。一九三五年四月、彼女が特に選んだメンバーに集まってもらい、スミスにアルコールの問題を告白してもらえるように、正直にみんなに欠点を語ってもらう。参加者の正直さに応えて、スミスも酒がやめられないことを告白する。それを受けて、彼女は、どうしたらスミスが酒をやめられるか、導きを求めて祈る。

：みんなが自分の欠点と、克服できたものは何かを深く掘り下げて話していったのです。そして沈黙がありました……。果たしてボブ〔スミス〕は何をしやべるのだろうか、と私は静かに待っていたのです。：彼は、あの独特の真剣な口調で話を始めました。ボブは、「そうですね、皆さんの分かち合いは、大変きびしい正直さに満ちたものでした。そこで、私も職を賭けることになるかもしれませんが、告白します。実は、私は人目を避けて飲んでいて、酒がやめられないのです」

「あなたのために、お祈りしましょうか？」と私たちは言いました。
つぎに、だれかが「ひざまずきましょうか」というと、

「お願いします」と彼は言ったのです。それで、みんなでひざまずきました。

：翌日の朝、アルコールについて何も知らない私は：ボブのために、祈りを唱えていました。：私は、「神様、飲酒のことについては何も知りませんが、ある生き方をすれば酒がやめられるという確信をボブに伝えました。神様、いま、あなたのお力添えが必要です」と唱えました。すると、何かが聞こえたのです。私はそれを「導き」と呼んでいます、それは頭の中にこだまする声のように聞こえてきました。「ボブは、アルコールに一滴たりとも触れてはならない！」と。：聞こえてきたのは、決して私の考えではありません。そのことは確かです。そしてボブに電話をして、あなたのための導きがいただけ、と伝えたのです。「これはとても重要なことなのよ」と私は言いました。そして、午前十時にやってきたボブに、アルコールには一滴たりとも触れてはならないという導きだったと伝えると、彼はとても落胆していました。「だれそれに会え」とか「どこそこに行け」とか、彼は、導きとはそういうものだと考えていたようです。⁽²⁹⁾

ボブ（ロバート）・スミスの落胆は理解できる。アルコール依存に苦しむ人に対して、アルコールに触れてはならないというのは、常識的すぎるアドバイスであり、神からわざわざ下される導きとはとても思えない。そして、ミスは引き続きアルコール依存に苦しむ。心からやめたいと思っているのだけれどどうにもならないと嘆く彼に、ヘンリエッタは「あなたが心からやめたいのはわかっています。ただ、それを実現する方法がまだ見つかっていないだけなのよ」と慰める。

数ヶ月の間に、この導きがそれほど外れていなかったことが明らかになる。同年五月、一人のアルコール依存症者がニューヨークからアクロンに会社買収の仕事でやってくる。彼はOGMを通して断酒しており、他の仲間の断

酒のために尽力することによって不思議に飲酒渴望が和らぐという体験をしていた。彼の仕事は失敗に終わって、その夜、ホテルでふと飲酒をしたくなる。この渴望を和らげるためには、他のアルコール依存症者を紹介してもらい、その人が断酒できるよう助けることがよいと思いついた彼は、牧師の紹介でヘンリエッタに電話をかける。彼女は彼とスミスとを自宅で引き合わせ、二人は長時間語り合う。ニューヨークの男は断酒を続けていく力を得る。一方、スミスも男の正直な話に力を得て、断酒を試み、手の震えを押さえるための軽い迎え酒が最後の酒になる。そして、飲酒の問題をこれまで隠して外科医をやってきたが許してくれと、近所の患者のところを詫びて回る。導きはスミスが完全に酒を断つ必要を言い当てていたが、これにはさらに続きがある。スミスは、ニューヨークから来たこの男ウィリアム・G・ウイルソンとともに、アルコール依存症者が助け合って断酒する共同体を創始する。この共同体は数年後にOGMから独立し、Alcoholics Anonymous (以下、AA)と称するようになり、現在は世界で二〇〇万人近いメンバーを抱える、世界最大の断酒相互扶助団体となった。⁽³⁰⁾ スミスたちはOGMから独立したものの、OGMの理念通りの人生の変革を成し遂げたわけである。

六 罪から依存へ、道徳的矯正から心理療法へ

OGMからAAは独立したのだが、神にゆだねること、ひざまずいて祈ることと、導きは、しばらくは引き続き重んじられていた。特にスミスはその後も朝の祈りと導きを習慣にしていた。「朝の礼拝は、最初に祈り、つぎに、高名な聖書の章句を二十分ほど学び、そして瞑想する、という順でおこなわれていました。瞑想しているときに、その日、自分に恵まれた能力をどこで生かすべきか、沈黙の中で導きを待ちます。その導きを聞き取ることができ

ると、…敬虔な気持ちでとりかかると」と、スミス(31)の一日が始められていたと友人の一人は語る。晩年にも、AAの組織運営上の課題について、着手すべき導きを得ていないから反対だと、一九四九年三月にウィルソンに書き送っている。(32)

AAがアルコール依存から回復するための物差しとして作成した文書である「一二のステップ」には、OGMが用いてきた表現があちこちに生かされている。やや煩瑣になるが、第二節にあげた、OGMで勧められている「四つの霊的活動」と比較してみよう。(一)は、もう一人のクリスチャンと問題をわかちあうことであったが、第五のステップには、「神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた」とある。また(二)私たちの人生、過去、現在、未来を、神の庇護と導きへと委ねることは、第三ステップの「私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした」に近い。また(三)私たちが不当なことをしたすべての相手に、直接にあるいは間接に償いをすることは、第八・第九ステップの「私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たち全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった」「その人たちやほかの人を傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした」に影響が及んでいそうだ。(四)の、神の導きを聞き、受け入れ、信頼し、私たちの言行すべてにおいて、大小を問わず、実践し続けるという項目は、ステップの一一と一二の「祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求めた」「これらのステップを経た結果、私たちは霊的に目覚め、このメッセージをアルコールに伝え、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した」に、表現が引き継がれていると見て不自然ではない。しかしOGMのすべてが引き継がれたわけではもちろんなく、たとえばOG

Mでとても重視された「ひざまずいて祈る」ことは、「一二のステップ」の原案にあったものが最終段階で削除されている。また「神」には「自分なりに理解した as I understand」などという留保が加えられている。⁽³³⁾

ここでAAとOGMを比較したのは、AAからアルコール以外の多様な依存症の相互扶助団体が派生していった、それらの団体の掲げる理念とOGMの理念との距離を確認するためである。OGMにおいて、罪は否定的に捉えられるけれども、実は神に身をゆだねることによって修復可能にされている。AAは、道徳的絶対性という大風呂敷の理想を追求するOGMよりもアルコール依存の問題に特化し、また、飲酒を罪や墮落として道徳的に捉えるのではなく、自分の意志ではどうにもならない症状として疑似医学的に捉えることによって、これまで犯してきたことにたいする罪責感を和らげる（抹消はせず、償いの必要を確認する機会が繰り返しもたれる）。さらに、AAに関わった心理療法家たちにより、症状としての依存という概念は理論整備され、症状を作り出した生育史上の原因へとさかのぼることによって、依存は心理療法的な治療の対象となるとともに、そのような原因を作り出した養育者の責任を問う方向へも展開した（アダルトチルドレン論、共依存論）。かつては本人の罪として神を対象にゆだねられたものが、心理療法家を対象に告白するという形式に移行し、また本人の罪ではなく養育者の罪という含意をもった依存あるいは嗜癖という概念へと移行した。心理療法家たちによるこうした移行は、依存の対象が、アルコール以外の薬物への依存、摂食障害、虐待被害者、盗癖や買い物依存などにいたるまで多様化していく過程と相まって、OGMでは比較の見えやすかった、行為の道徳的責任の所在や、心の成長の目指す先を、見えにくくもしてしまった。スマスがウィルソンと出会ったときの、相互扶助が断酒継続に必須という発見も忘却され、自分のトラウマをかかえてただ癒されるのを待つ人々は、どこを目指すのか。

七 へ心なおしへの実践とその意義

OGMは、神に身をゆだねて自分の「罪」を告白させ、またどのようにしたらよいかの導きを得て、参加する個人の人生を変革するという実践をもっていた。またOGMでは、指導的な個人の変革を通して、またさまざまな社会的役割を持つ人々の変革を通して、世界の変革もなし得ると考えられていた。戦後の政治・経済・文化に関わる人々の国際的交流に資した点では、OGMは、一定程度の変革に関わったということができらるだろう。

「へ心なおし」とは、「何らかの悩みを抱えた心を、単なる原状復帰や症状の治癒や心の健康ではなく、人間を超越した存在の力を借りて、より高い段階、完成へと向上させると信じられている実践」であると先に定義した。ところで、この「より高い段階、完成」という目標はどんなものなのか、そこへどのように導くのか、それに何の意義があるのかは、どのように示されるのだろうか。また、目標へと向上しようとするものを力づける源泉は、どこから得られるだろうか。OGMの場合、それらは、ゆだねて告白し、導きを得て、人生を変革させるという、三つの実践にあった。

神あるいはキリストとの頻繁なコミュニケーションを導入することにより、OGMでは、一人の生をつねに見守り、つねに問う超越的他者を確保しようとした。これにより、誰にも知られなければ、また他人に迷惑をかけなければ、その行為はとがめ得ないという相対主義を克服することを目指した。神に罪を告白し、導きで応答を返されるところというコミュニケーションを置くことによつて、OGMに参加するものと超越的他者との間には倫理的な共同性が作られるようになって⁽³⁴⁾いる。ただし超越的他者とのコミュニケーションは目に見えず、失われてもわかりにくい

ので、導きはつねに恣意的になる危険性をはらむ。実際、ブックマンの行動はそのような恣意的な危うさをも抱えていた。この危険に対処するのが直接の目的ではなかったものの、AAではアルコールの問題に焦点化し、メンバーを匿名にすることで、恣意性にブレーキをかけようとした。また、AAに続く各種依存症の相互扶助団体は、AAの主要なアイデアを借り受けつつ、「自分なりに理解した神」などの語彙を取り除くことでカリスマ的個人の恣意性を避けようとして、脱宗教化という方針をとった。ところが、脱宗教化は、超越的な他者と向かい合うことで自らの行為の責任を問うという、倫理的な共同性をリセットしてしまう。行為の責任をとる主体が曖昧になり、また相互扶助の重要性がぼやけてしまう。だから、これら相互扶助団体の実践の背後には、OGMの〈心なおし〉——超越的存在との倫理的共同性の確保——が前提としてあったことは、銘記されなければならない。超越的存在を取り去るのなら、それに変わる何らかの方法を補わなければならないのである。人間と向かい合う超越的存在のそのような意義を、OGMの〈心なおし〉の実践は示しているように思われる。

注

- (1) 日本での活動については、政策研究大学院大学編『澁澤雅英オーラルヒストリー』政策研究大学院大学、二〇〇四年に詳しい。また、国際IC日本協会のホームページ (<http://homepage3.nifty.com/mra/>) を、二〇〇九年一月一〇日に参照。
- (2) ブックマンのナチ擁護発言としてしばしば引用されるのは以下である。「共産主義の反キリストに対する防衛前線を築いたヒトラーのような人物について、私は天に感謝する。…もちろん私はナチがおこなったことのすべてを容赦するわけではない。反SEM主義など、もちろんひどいものだ。しかしヒトラーが神の支配に身を任せたとしたら、世界にとって意味あるようなことが起こるだろう。あるいはムッソリーニ、あるいはどんな独裁者でも。あのような人物を通して神は一つの国を支配し、一つ一つの困難な問題を解いてゆかれるのだ」 *The New York World-Telegram*, 25 August, 1936. 引用は Reinhold Niebuhr による批判

記事より。“Hitler and Buchman,” *The Christian Century*, Oct. 7, 1936, pp. 1315-16. ブックマンの発言は多様な解釈の余地を残しているが、ニーバーの批判はブックマンの恣意的な行動やOGMのありかたを総合的に見た上でのものと考えられる。

- (3) 日本語で入手できる書籍としては、ブックマンの後継者 Peter Howard, *Frank Buchman's Secret* (London, Heinemann, 1961). 相馬雪香訳『フランク・ブックマンの秘訣』毎日新聞社、一九六二年、また、創始者ブックマンの講演集 Frank N. D. Buchman, *Remaking the World: Moral Re-armament* (Littlehampton Book Services, 1961). 相馬雪香訳『世界を再造する』MRAハウス、一九五八年(毎日新聞社、一九五〇年)、坂田俊夫『道徳再武装——MRAの挑戦』組合書店、一九五〇年、などがある。

- (4) 島嶼進「心なおしとは何か——新宗教の日常的倫理実践と日本の『心』観の伝統」(『宗教学論集』一九、駒澤大学宗教学研究會、一九九七年)。この論文は主として、天理教、金光教、修養団捧誠会など、日本の新宗教を対象として、宗教が日常生活において心理療法的性格を持つようになる事象について述べているが、キリスト教科学やニューソートなどの事例にも言及して比較的視点を提示しており、OGMのような事例にも適用可能と思われる。また、Linda A. Mercadante, *Victims and Sinners: Spiritual Roots of Addiction and Recovery* (Westminster John Knox Press, Louisville, Kentucky, 1996) および小池靖『セラピー文化の社会学』勁草書房、二〇〇八年の二著にも示唆を受けた。

- (5) OGMについて外部から知るために参照しうる資料を、前註の三点以外にあげておこう。Garth Lean による創始者ブックマンの伝記 *Frank Buchman: A Life* (London, Constable, 1985) が有名。London Hamilton, *MRA: How It All Began* (Moral Re-Armament, London, 1968) は、創始者ブックマンがオックスフォード大学を訪れたときのエピソードに焦点を当てたものである。Philip Leon, *The Philosophy of Courage or the Oxford Group Way* (Electric edition distributed by stepstudy.org, 2008, originally published by Oxford University Press, 1939) および Howard Arnold Walter, *Soul Surgery: Some Thoughts on Incisive Personal Work* (Oxford, John Johnson, 1932) は、OGMの思想をいかに紹介している。前者は「四つの絶対」と呼ばれる徳目を詳しく考察し、後者はゆたななことを導きなどの個人対象の実践について詳しい。The Layman with a Notebook, *What is Oxford Group?* (Electronic Edition Distribution by www.stepstudy.org, downloaded on Jan. 5, 2009, originally published by Oxford University Press, 1933) はメンバーの人生を振り返りながらOGMを説明するものである。A. J. Russell, *For Sinners Only* (Hats Off Books, 1932, 2003) は、OGMによって生まれ変わった人々のエピソード集として多くの言語に訳され、現在も読まれる。Walter Houston Clark, *The Oxford Group: Its History and Significance* (New York, Bookman Associates, 1951) および Allan W. Fister, *Drawing-Room Conversion: A Sociological Account of*

オックスフォードグループ運動における〈心なおし〉の実践とその意義

- the Oxford Group Movement* (Durham, Duke University Press, 1950) はいずれも学術論文である。後者は新宗教運動 (New Religious Movements) との比較における OGM を考えようとしている。
- (6) 同団体のウェブサイト (<http://www.iofc.org/>) を二〇〇八年二月二十五日に参照。
- (7) 葛西賢太「救世軍の山室軍平と禁酒運動——自助努力、社会事業、宗教的救済のはざままで」『駒澤大学心理学論集』一〇、二〇〇八年、七九—八七頁。
- (8) *The Layman with a Notebook*, pp. 6-9.
- (9) Walter, p. 5.
- (10) *The Layman with a Notebook*, pp. 15-23.
- (11) 澁澤雅英氏は、一九五六年頃、ロンドンのバークレイ・スクエアのブックマン邸で、イギリスの外交官、著名新聞社主筆、ナイジェリアの部族の長、アメリカの労働組合の指導者など、当時の日本人には考えられなかつたきわめて多様な人と会食の機会を得て、MRA (OGM) の「世界性」に圧倒されたと述べている。政策研究大学院大学編、四八—五一頁。
- (12) Lean, pp. 29-32.
- (13) 前掲『秘訣』、一五七頁。
- (14) 政策研究大学院大学編、五五—五六頁。
- (15) 前掲『再造』、三四六頁。
- (16) 前掲『秘訣』、一四三—一四六頁。
- (17) 前掲『秘訣』、一二五頁。
- (18) MRA 国際移動学校同窓会公式サイト (<http://www.mra-reunion.com/>) を二〇〇九年一月三日参照。
- (19) 政策研究大学院大学編、四八頁では、澁澤雅英氏が父親に謝罪の手紙を送ったりしたことが言及されている。
- (20) *The Layman with a Notebook*, p. 69. 前掲『秘訣』、三四頁、一三六頁。
- (21) Walter, p. 26. また前掲『秘訣』、一五九頁にはほぼ同内容の引用がある。
- (22) 正直、純潔、無私、愛の四つを最初に徳目としてたてたのは、Robert E. Speer, *The Principle of Jesus: Applied to Some Questions of To-day* (New York, YMCA Press, 1902) だ、それを敷衍した Henry B. Wright, *The Will of God and a Man's Lifework* (New York, YMCA Press, 1909) を元に、ブックマンは「四つの絶対」をまとめたという。Speer は正直について、嘘は悪魔の言葉と戒めたヨハネ福音書八章、純潔について、右手が神の意志にさからうなら右手を切り落とせというマタイ福音

書五章、無私について、出し惜しみする者はイエスの弟子ではないとするルカ福音書一四章、愛についてのさまざまな定義をあげたヨハネ福音書一三章などを見る。OGMの歴史を調べた Dick B. (Burns) の *A Design for Living* (Hawaii, Paradise Research Publications, 1998), pp. 237-238 なども参照。

- (23) 前掲『秘訣』一五七頁、一七三頁。
- (24) 前掲『秘訣』五二頁、一三三頁。
- (25) The Layman with a Notebook, p. 25.
- (26) 前掲『再造』四九三頁。
- (27) The Layman with a Notebook, pp. 41-42.
- (28) Alcoholics Anonymous, *Dr. Bob and the Good Oldtimers: A Biography, with Recollections of Early A.A. in the Midwest* (New York, Alcoholics Anonymous World Services, Inc., 1980). A A 日本出版局訳編『ドクター・ボブと素敵な仲間たち——アメリカ中西部における初期 A A の思い出』NPO 法人 A A 日本ゼネラルサービス・オフィス、二〇〇六年、八七頁。
- (29) 前掲書、八三—八六頁。
- (30) この経緯は、葛西賢太『断酒が作り出す共同性——アルコール依存からの回復を信じる人々』世界思想社、二〇〇七年、特に第四章に詳述した。
- (31) 前掲書、四六〇頁。
- (32) 前掲書、四七五頁。
- (33) 「十二のステップ」での「自分なりに理解した」という強調は、原文のまま。Alcoholics Anonymous, *Alcoholics Anonymous: The Story of How Many Thousands of Men and Women Have Recovered from Alcoholism*, Fourth Edition, (New York, Alcoholics Anonymous World Services, Inc, 2001). A A 日本出版局『アルコホーリクス・アノニマス——無名のアルコホーリクスたち』A A 日本ゼネラルサービスオフィス、二〇〇二年、八五—八六頁。
- (34) 超越的他者との共同性による倫理という考えは、末木文美士『仏教 vs. 倫理』ちくま新書、二〇〇六年での、死者との共同性という考えに示唆を得たものである。